『建礼門院右京大夫集』の『源氏釈』『源氏物語』引用

――表現の基底にあるもの――

久保貴子

一

『建礼門院右京大夫集』が今日まで伝存してきた主だった理由は、①作者・建礼門院右京大夫が奉仕した建礼門院徳子を始め藤原隆信や平資盛など、実在の人物が実名で記されることから、歴史的な視点からも価値が認められていたと思われること、②その諸伝本の多くに伝わる奥書が示すように、作者自筆原本が早い段階から書写され、多くの読者を獲得し得たこと、③『建礼門院右京大夫集』は藤原定家の勅撰集編纂のための「書き置きたる物や」との尋ねに応じて差し出された物（それが現存の形かどうか、その成立状況は別として）であり、成立の背景と目的とが一応明確であること、④結果その勅撰集『新勅撰和歌集』に自身の望みどおり「建礼門院右京大夫」の名で二首が入集を果たしていること（それ以外の「玉葉」・「風雅」・「新千載」・「新拾遺」・「新続古今」・「夫木」・「隆信」の和歌集などにも採られたこと）、⑤『平家物語』にも「ある女房」としてではあるが、その歌が採られていること、⑥『徒然草』に逸話が載せられること、などが挙げられるだろう。

このことが示すように、極めて多層的な内容を持つ作品であるが、稿者は先に『建礼門院右京大夫集』は、平家時代最末期の「建礼門院」女院に奉仕した女房「右京大夫」の日記文学的側面を重要視することで、改めてその作品の真価や成立事情が捉えられるのではないか、と述べた（「日記文学としての『建礼門院右京大夫集』」（『日記文学

研究　第三集』日記文学研究会編、新典社、平成２１年）。近時、高倉院の文学活動を捉えなおすべきとの説や平家歌壇を再考する意見もある。[1]

平安朝末の宮廷社会は、政治的にも文化的にもその全盛期の摂関時代を憧憬する営為のなかにあったことは、夙に指摘されてきた。[2] 漢籍以外にも、『古今集』や『伊勢物語』、『源氏物語』には特に重きが置かれていたことは言うまでもない。そしてそれは、中宮に奉仕した建礼門院右京大夫にとっても最も身近な作品群であり得たはずである。中でも『源氏物語』の存在は重要であったと思われる。

本稿は、前半では父親が著した『源氏物語』の注釈書『源氏釈』との影響関係を中心に考える。その過程で、作者の『源氏』の教養がどこから培われていたのかを確かめる。後半では『源氏物語』引用をめぐる新たな視点を供してみたい。平安時代末の女房、建礼門院右京大夫の創作世界がいかにこの物語の世界と関わったのかを考察する試みである。

二

先ず、問題の所在を確認したい。

『源氏物語』の注釈書『原中最秘抄』は、三箇大事のうちの一項目、五条の夕顔の宿の所有者「揚名介なる人」について、

やうめいのすけ　　源氏あらはしに云諸国ノ介也

伊行朝臣尺　源氏の人のなる官也云々　奥入云此事源氏第一難儀也非下可二勘知一事上抑往古チ除目揚名ノ介ある[3]へしと見えたり其家にゐるへき道理なしと云々……

と『源氏釈』、『奥入』以下の諸注・諸説を引用する。例えばこの例に見られるように、『源氏あらはし（源氏釈）』は、世尊寺伊行が著した現存最古の『源氏物語』の注釈書である。伊行の名は、同じく『源氏物語』の注釈書『河海抄』に「伊行本」の呼称が見えていたり、藤原定家が書写校訂した『伊勢物語（流布本）』の奥書に「伊行所持本」と記されているなど、『伊勢物語』の書写伝来にも深く関わった、その研究の先駆者としても広く知られている。

その伊行女と目されて諸説異論を唱えないのが、『建礼門院右京大夫集』（以下、『右京大夫集』と略す）を遺した建礼門院右京大夫である。『右京大夫集』に『源氏物語』の影響を読み取ることは、先学により押し進められてきているのだが、[4] 近時、例えば谷知子氏は「『建礼門院右京大夫集』を読むと、右京大夫が『源氏物語』を知悉していたことは明らかである。[5]」とするものの、『源氏釈』と『右京大夫集』を切り結んでの考察はなされていない。

『右京大夫集』で、その父について触れている箇所をあげる。

太皇太后宮より、おもしろき絵どもを、中宮の御方へ参らせさせたまへりし中に、昔ててのもとに人の手習ひしてとて、詞書かせし絵の交じりたる、いとあはれにて、

めぐりきて見るにたもとを濡らすかな絵島にとめし水茎の跡　（79）

二代后・多子から中宮徳子の御所へ絵が差し上げられた中に、亡父・伊行筆の絵詞を見つけて感慨深く、涙で袂を濡らしたと言う。世尊寺家は行成以来の入木道の家としても知られ、当時、世尊寺流の書風は一世を風靡した。現存する伊行遺墨の国宝「葦手絵和漢朗詠抄」は殊に名高い。また、『新勅撰集』の草稿本の清書は、行能が成している。右京大夫の甥にあたる人物である。行能が、河内本を清書したとする奥書を有する伝本もある。『花鳥余情』には「行能自筆本」と見えており、行成以来、『源氏物語』の書写伝来に世尊寺家の人々が深く関わっていたことが再確認されて良いだろう。右京大夫自身の出自意識は、『右京大夫集』巻末近くで俊成九十賀に後鳥羽院からの下賜の袈裟に刺繍を施したという記事からも充分に察せられるであろう。伊行が記した『夜鶴庭訓抄』の伝書を鍾愛する娘（右京大夫か）に与え遺したとする識語も存している。右京大夫のより身近に『源氏物語』や『源氏釈』、その他の書物の存在があっただろうことを重く受け止めるべきではないだろうか。

三

従来『右京大夫集』への『源氏物語』が与えた影響は大きいと考えられている。例えば、61「夕日うつる」の歌と「薄雲巻」の藤壺死去の場面を、２２８「救ふなる」・２２９「かなしさの」・２３０「かばかりの」の資盛の遺言通りに供養する歌と、「幻巻」の光源氏の故紫上の手紙を焼く場面を、さらに１１５「年月の」の歌に「浮舟巻」、１１６「身の上を」・１１７「有明の」の歌に「朝顔巻」の女君を重ね合わせているとされている。[6] 他にも、２５６「秋過ぎて」の歌に「夕霧巻」・「手習巻」に見える引板の描写を素地に落葉宮・浮舟に自身をなぞらえる、２５７「谷川は」の歌に「朝顔巻」の叙述や歌を念頭におくとする指摘もある。[7] ２３４「露消えし」のように「長恨歌」やその引歌世界を踏まえ、楊貴妃をしのぶ玄宗皇帝の立場に重ねつつその向こう側に『源氏』の世界が垣間見える例もある。[8]

『右京大夫集』はおおよそ三百六十首前後から成る作品

であるから、明確だと思われる『源氏物語』引用を右にあげた十首ほどであると考えるとその一割にさえ及ばないことになろう。ただそうした数の評価は別にして、既成の論からも右京大夫がこの物語に強い影響を受けていたことはうかがえる。その教養はどこから手に入れたのであろうか。そのことを考える上で父・伊行の存在は大きいだろう。ひとまず父・伊行を経由する形での右京大夫の『源氏物語』享受を考えるためには、やはり『源氏釈』と『建礼門院右京大夫集』との関係を考察しなければならないだろう。

ここで、『源氏釈』の主な研究史を概観したい。池田亀鑑氏は、『源氏釈』の形態と性質を明らかにし、『源氏物語』の最も初期の註釈形態として注目に値するとしながらも、諸本による記事の異なりも生じていて（本文系統論の構成のために）、総じて有力な資料とすることはかなり困難な点があるとされた。[9] 稲賀敬二氏は、『源氏釈』の異本発生の条件に註の所在を源氏物語本文の要約による方法がとられたことを指摘し、註の内容たる和漢の故事が原典をそのまま引用するのではなく梗概的に記す点、（定家の『奥入』などではこのような梗概化の態度が否定されているのに対して、『紫明抄』などでは却って発展させられている）源氏物語梗概書誕生の一つの道を示すものとされた。[10] 伊井春樹氏は、その抽出作業は伊行の所為で、伊行自身の研究進展の結果と捉えて分類した上、その相違を詳細に論じられた。[11] 田坂憲二氏は、伊行による『源氏釈』の原型本は、本文の梗概化や本文抄出から出典注記までを包含した「注釈書兼梗概書」のような形態で作成されたものだとされた。[12] 堤康夫氏は、和歌的方面を重視した註釈書であることを明確に指摘された。[13] さらに渋谷栄一氏は、多様な現存諸本を集成されるに至っている。[14] また中野幸一氏は、『源氏釈』の諸本は、校合不可能なほどに記述が大きく異なり、原本の形態や成立事情が必ずしも判然としないが、『源氏物語』の初期の註釈の形態として、もとは本文に書きこまれていた注記を本文とともに抜き出したものと結論づけられた。[15] いささかくだくだしく研究史を確認したが、稿者はこの複雑な成立事情に立ち向かおうとしているのではない。資料として扱うことが困難な『源氏釈』であるが、右京大夫がこれをどのようにして摂取しているか、どのようにして自身の作品背景に反映させていったかその状況を探りたいのである。

今試みに『右京大夫集』の詞書や歌が、何らかの引歌・歌語的な表現の影響を受けていると考えられるものと、『源氏釈』が施注する引歌などとを照らし合わせて見ることとした（別表）。ここで資料として用いた『源氏釈』は、渋谷氏前掲書[16]によるものだが、「どこまでが伊行の説であ

り、どこからが後人の訂正あるいは増補の説か難しい」「都立中央図書館本は『源氏釈』の名に仮託された別の注釈書と認定すべきであろう」と述べられるように今後の課題を残していることはいうまでもないだろう。一方『右京大夫集』[17]も、井狩正司氏の『建礼門院右京大夫集　校本及び総索引』によりその諸本が二系統六類に分類され、九州大学附属図書館蔵細川文庫本が善本と目されるものの、伝津守国夏筆昭和美術館本[18]などと相互に脱落を補足する状態にあると言えるため、その資料としての扱いはさらに慎重になるべきであると思われる。

以上を踏まえた上で、敢えて参考結果を纏めれば、『右京大夫集』の引歌・影響歌と考えられる歌を『源氏釈』で見ると、およそ三十首に余る。全体の一割程度ということになる。『源氏釈』は和歌的方面を重視した註釈書であると考えられていることは前述した[19]。したがってその施注に詳しいが、このことは、右京大夫との接点を見出す上での手がかりとなるであろう。『古今集』・『伊勢物語』への嗜好は、当時とすれば自然といえようが、加えて『源氏釈』との関連において、伊勢・躬恒への嗜好は認められて良いのではないだろうか　―「桜人」を有する佚文資料からは、典拠と思しい歌が、紀貫之と凡河内躬恒の歌に偏っているとの指摘もある[20]　―。また、『白氏文集』・『和漢朗詠集』、「催馬楽」（『源氏釈』が引く歌謡は大半が催馬楽であるが）の引用も認められる。一方で『源氏物語』の該当注記所在は、一定の巻に集中したり、偏ったりすることもない。しかし、従来論点とされてきた現行の『源氏物語』にはない「桜人」の巻の注記が『源氏釈』前田家尊経閣本には十七項目あるが、その施注された引歌が三項目にわたり散見されることは注目されるものである。冷泉家時雨亭文庫本『源氏釈』の後藤祥子氏「解題」[21]を受けて、加藤昌嘉氏は「世尊寺伊行は『源氏釈』執筆の最初の段階では桜人巻を所有しておらず、後に入手して［資料1］〈前田家尊経閣文庫本『源氏釈』・稿者注〉の注を付加したことになるわけだろうか。或いは、桜人巻注は『源氏釈』テキストが著者伊行の手を離れた後に付加されたものと考える方がよいのだろうか。[22]」とされている。現時点で、それがどの段階かは不明であるのだが、「桜人巻」に付けられた注の引歌が、右京大夫の素地となり、影響歌として『右京大夫集』に表出させた可能性も残されているように思う。

また、２０５「またためし」の歌は、板本では下巻冒頭歌にあたる、また３２３「今はただ」の歌はいわゆる七夕歌群の次に配されている。いずれも長い詞書で知られるが、ここに「ありしよりけに」・「ありしよりもけに」と共に深い述懐が込められる箇所である。前者は資盛と偲びあう気

持ち、後者は再出仕の折、かつての後宮を懐かしむ折の気持ちを記す。これは、

忘るらむと思ふ心のうたがひにありしよりけにものぞ悲しき（『伊勢物語』二十一段・『新古今集』巻第十五恋歌五　読人知らず）

の古歌に見られる歌語的表現だと思われるが、『源氏釈』に引く歌（都立中央図書館本）を素地に、二度にわたり繰り返している点は注目してよいのではないか。『右京大夫集』はその構成上、「四十首の題詠歌群」と「七夕歌群」の配置によりそれぞれ先行する部分を締め括ると考えられ、諸々成立論の根拠とされてきた。[23] 樋口芳麻呂氏・佐藤恒雄氏などが述べられるように成立の最終段階で整理や加筆が行われたことを想定すれば、該当箇所の詞書に極めて意図的に「ありしよりけに」の表現が用いられたとも考えられる。以上の考察から伊行の『源氏釈』は、右京大夫の内なる深層に潜み、血肉化して自身の作品世界に抽出されていた蓋然性が認められるであろう。

次節ではそのような父の著作を通して自家薬籠中のものとなったと思しき『源氏』引用がどのように『右京大夫集』の核心部分にあらわれているのかを考察したい。

四

従来、『右京大夫集』に表出する追憶の中心は、平家の公達平資盛で、藤原隆信との恋愛譚を差し挟むものの、作品全体を通してその平家文化圏の思い出を綴っているとされてきた。『源氏物語』からの影響についても、「『源氏物語』の影響はいくつか見られるのだが、不思議にそれは資盛関連歌に集中している。[24]」との意見もある。迂遠なようだが、ここで、『右京大夫集』中に描かれる平家一門の公達たちの登場回数を確認したい（数字は歌番号―含、詞書・詠者名―、＊は稿者注を示す）。

〈地下〉

清経―計2回

　清経の中将　75・217

維盛―計12回

　権亮維盛　6・8

　少将　6

　あれ　6

　維盛　9

　権亮　95・97

　維盛の少将　127

わが物申す人のこのかみなりしは 187
男 187
維盛の三位中将 215（216）
三位中将 217（218）
重衡―計5回
宮の亮重衡 8
重衡 9
宮の亮 195（196）
この人 197
重衡の三位中将 213
重盛―計7回
小松の大臣 56・58・103（104）
同じ大臣 57
大将 58
父大臣 77・159
資盛―計16回
資盛 9
資盛の少将 11
とかく物思はせし人 77
服になりたる人 102
ひきあけて入り来りし人 115
人 120（121）
その人 164・211
わが物申す人
蔵人頭 187
はかなくなりし人 205・328（329・330）
ただ一筋に見し人 234（235）
はかなかりし人 248
覚めやらぬ夢と思ふ人 269
水の泡と消えにし人 328（329・330）
忠度―1回
忠度の朝臣 328
経正―計2回
経正 92
経正の朝臣 95
知盛―1回
知盛の中将 98
通盛―1回
通盛の朝臣 89
宗盛―計2回
右大将 165
八島の大臣 57
〈堂上〉
親長―計3回 59

親長　335（～340）・341（～348）・349
親宗―1回
　親宗の中納言　335
時忠―1回
　宮の権大夫時忠　82

このことから、維盛と資盛が他の公達と比べ群を抜いて多く描き出されていることが理解できよう。維盛は、資盛の兄にあたり当時の平家一門において、嫡流中の嫡流である。この維盛の姿を描くことは、隆盛を極めた平家時代を描き出すことに他ならない。

従来、盛大に行われたという後白河法皇五十賀の際の、維盛に関する次の部分は特に有名である。夙に指摘されてきたように、『源氏物語』の「紅葉賀巻」・「花宴巻」を重ねる箇所であるが、現存『源氏釈』諸本は、この「紅葉賀巻」の冒頭で「常よりも光ると見えたまふ」とまで賞賛された光源氏が青海波を舞う該当部分を欠いている。「花宴巻」の該当部分あたりにも光源氏の姿への言及はない。

また、「維盛の三位中将、熊野にて身を投げて」とて、人の言ひあはれがりし。いづれも、今の世を見聞くにも、げにすぐれたりしなど思ひ出でらるるあたりなれど、際ことにありがたかりし容貌用意、まことに昔今見る中に、例もなかりしぞかし。されば、折々には、めでぬ人やはありし。法住寺殿の御賀に、青海波舞ひての折などは、「光源氏の例も思ひ出でらるる」などこそ、人々言ひしか。「花のにほひもげにけおされぬべく」など、聞こえしぞかし。その面影はさることにて、見なれしあはれ、いづれもと言ひながら、なほことに覚ゆ。「同じことと思へ」と、折々は言はれしを、「さこそ」といらへしかば、「されど、さやはある」と言はれしことなど、数々悲しとも言ふばかりなし。

春の花の色によそへし面影の空しき波の下に朽ちぬる　（215）

かなしくもかかる憂き目をみ熊野の浦わの波に身を沈めける　（216）

ここで光源氏に例えられる維盛は、「花のにほひもげにけおされぬべく」と美しさを讃えられ、「春の花の色によそへし」と詠まれるに至る。これは、『右京大夫集』冒頭近くで、すでに維盛の姿を「警護の姿、まことに絵物語に言ひ立てたるやうにうつくしく見えしを」と記した場面で、中将実宗が

うらやまし見と見る人のいかばかりなべてあふひを心かくらむ　（6）

と詠んだのを受けて、

なかなかに花の姿はよそに見てあふひとまではかけじ
とぞ思ふ　　（7）

と詠んだことと呼応していると考えられている。[25]『右京大夫集』における維盛の美しさは「春の花の姿」に凝縮して描かれていると言える。この同じ場面を他の作品ではどのように記すのかを確認したい。

法皇御所・法住寺殿での試楽は、『玉葉』安元二年正月二十三日の条に、[26]

就レ中、維盛容兒美麗、尤足二歎美一、

とあり、平家一門とは敵対する立場にあった九条兼実をして賞嘆させている。群書類従本『安元御賀記』には、

権亮少将。右の袖をかたぬぐ。かいふのはんび。らでんのほそだち。こん地の水のもんのひら緒。櫻もえぎのきぬ。山吹の下がさねやなぐゐをときて。おいかけをかく。（中略）青海波の花やかに舞出たるさま。維盛の朝臣の足ぶみ。袖ふる程。世のけいき。入日の影にもてはやされたる。似る物なく清ら也。おなじ舞なれど。目馴れぬさまなるを。内院を始奉りいみじくめでさせ給ふ。父大将事忌もし給はす。おしのごひ給。ことはりと覚ゆ。片手は源氏の頭の中将ばかりだになければ。中々に人かたはらいたくなんおぼえけるとぞ。[27]

と伝え、「青海波こそなをめもあやなりしか。」と賞賛する。この『安元御賀記』と『平家公達草紙』との類似関係は、すでに指摘される通りであるが、[28]特にこの部分は記述の一致を見て詳細を極める筆遣いである。人々は『源氏物語』の物語世界を目前に重ね見て賞賛を惜しまない。

しかしながら、『源氏物語』の「源氏の中将は、青海波をぞ舞ひたまひける。片手には大殿の頭中将、容貌用意人にはことなるを、立ち並びては、なほ花のかたはらの深山木なり。」（紅葉賀巻）、「花のにほひもおされて、なかなかことざましになん」（花宴巻）を直接的に受けて、「花の姿」と表現したのは『右京大夫集』ならではの独自の視点であると考えられる。藤壺の光源氏への秘めた思いを詠んだ歌にも「おほかたに花の姿を見ましかば露も心のおかれましやは」（花宴巻）と詠まれていた。

さらに『平家物語』には、

此三位中将、桜の花をかざして青海波を舞うて出でられたりしかば、露に媚びたる花の御姿、風に翻る舞の袖、地をてらし天もかかやくばかりなり。

（覚一本・巻十「熊野参詣」）

とあり、『右京大夫集』と『平家物語』との類似性も認められて良いだろう。[29]

『右京大夫集』が、上述した作品に比べ、『源氏物語』に重きをおくことは理解できようが、繰り返し「花の姿」と記

し留めることに拘っているように思える。これはどのような意図があってのことだろうか。次に、資盛の記述を確認する。

五

右京大夫は資盛の悲報に際し、「まことにこの世の外に聞きはてにし。そのほどのことは、まして何とかは言はむ。みなかねて思ひしことなれど、ただほれぼれとのみ覚ゆ。」（２２３）と覚悟していたことではあっても、放心状態にあった。さらに「身をせめて、悲しきこと言ひ尽くすべき方なし。」（同）と言い尽くすことも出来ない悲しみを吐露する。そういう状況の中で「後の世をばかならず思ひやれ」と言った資盛の言葉を思い出し、資盛の手紙を漉き返させてお経、地蔵六体を書いて供養した。

身ひとつのことに思ひなされて悲しければ、思ひを起こして、反古選り出だして、料紙にすかせて、経書き、またさながら打たせて、文字の見ゆるもかはゆければ、裏に物押し隠して、手づから地蔵六体墨書きに書きまゐらせなど、さまざま心ざしばかりとぶらふも、また人目つつましければ、疎き人には知らせず、心ひとつに営む悲しさも、なほ堪へがたし。

救ふなる誓ひ頼みて写しおくをかならず六の道しるべせよ　（２２８）

さらに、

など泣く泣く思ひ念じて、阿証上人の御もとへ申しつけて、供養せさせたてまつる。さすが積もりにける反古なれば、多くて、尊勝陀羅尼、何くれさらぬことも多く書かせなどするに、なかなか見じと思へど、さすがに見ゆる筆の跡、言の葉ども、かからでだに、昔の跡は涙のかかるならひなるを、目もくれ心も消えつつ、言はむ方なし。その折、とありし、かかりし、わが言ひしことのあひしらひ、何かと見ゆるが、かき返すやうに覚ゆれば、ひとつも残さず、みなさように認むるに、「見るもかひなし」とかや、源氏の物語にあること、思ひ出でらるるも、「何の心ありて」と、つれなく覚ゆ。

かなしさのいとどもよほす水茎の跡はなかなか消えねとぞ思ふ　（２２９）

かばかりの思ひに堪へてつれもなくなほながらふる玉の緒も憂し　（２３０）

と尊勝陀羅尼なども書かせて供養する。『源氏物語』「幻巻」の一場面を想起し、作品中に「源氏の物語」と明記さ

れる唯一の箇所である。「幻巻」で、光源氏は亡くなった紫上の手紙を同様に漉き返させ焼却する[30]。右京大夫は、光源氏に自らを、紫上に資盛をなぞらえているものである。

ところで、「御法巻」で紫上は亡くなる直前、鍾愛する幼い匂宮に

「大人になりたまひなば、ここに住みたまひて、この対の前なる紅梅と桜とは、花のをりをりに心とどめてもて遊びたまへ。さるべからむをりは、仏にも奉りたまへ」

と遺言する。これを守る匂宮は続く「幻巻」で、

「母ののたまひしかば」とて、対の御前の紅梅とりわきて後見ありきたまふを、いとあはれと見たてまつりたまふ。

と大切に世話をしている。光源氏はその姿を愛しみ、形見の紅梅に鶯が楽しそうに鳴きたてるのを見て、

植ゑて見し花のあるじもなき宿に知らず顔にて来ゐる鶯

と紫上を喪った哀しみと追慕を詠んでいる。また匂宮は、

そのおそくとき花の心をよく分きて、いろいろを尽くし植ゑおきたまひしかば、時を忘れずにほひ満ちたるに、若宮「まろが桜は咲きにけり。いかで久しく散らさじ。木のめぐりに帳を立てて、帷子を上げずは、風もえ吹き寄らじ」

とさまざまな花の性質をわきまえて紫上が植えた花を「まろが桜」と呼ぶ姿を見せる。ここで並んで描かれる梅と桜は六条院春の町と、その主であった喪われた紫上を象徴する景物に他ならないだろう（因みにこの後も匂宮は梅と関わり続ける）。

先に維盛が「花の姿」と形容されることを述べた。とすれば、資盛は対比的に梅と形容された可能性があるのではあるまいか。『右京大夫集』を見る。

返る年の春、ゆかりある人の物参りすとてさそひしかば、何事ももの憂けれど、尊き方のことなれば、思ひを起こして参りぬ。帰さに、「梅の花なべてならずおもしろき所あり」とて、人の立ち入りしかば、具せられて行きたるに、まことに世の常ならぬ花のけしきなり。その所の主なる聖の、人に物言ふを聞けば、「年々この花を標結ひて恋ひたまひし人なくて、今年はいたづらに咲き散りはべる、あはれに」と言ふを、「誰ぞ」と問ふめれば、その人としも確かなる名を言ふに、かき乱り悲しき心の内に、

思ふこと心のままに語らはむなれける人を花も偲ばば　（211）

この歌の詞書には、「梅の花が並一通りでなく見事な所が

ある」として、世間一般のとは違うそのすばらしい有様を語る。そしてこの花は資盛が執着したものであることを知らされたという。源氏の軍勢が西国へ攻め下ることを聞き、心配の余り夢に見て（２０８）、いっそのこと死んでしまいたいと思う（２０９・２１０）歌と、身近な平家の人々の戦死を知り悪夢かと思う（２１２）歌のちょうど中間に置かれるというのも極めて示唆的であるように思う。

六

渡辺秀夫氏は、「梅」と「桜」には微妙だけれども決定的な違いがあると述べられる。[31]

「梅」については、『更級日記』の作者・菅原孝標女が、東国で物語世界への憧れを育んでくれた継母との別居の悲しさを述べた場面での、

頼めしをなほや待つべき霜枯れし梅をも春はわすれざりけり　〈作者〉

なほ頼め梅のたち枝は契りおかぬ思ひのほかの人も訪ふなり　〈継母〉

の贈答歌の例や（〈〉稿者注）、「色も香も昔の濃さに匂へども植ゑけむ人の影ぞ恋しき（『古今集』・巻第十六哀傷８５１・つらゆき）」などを引用して、

梅の花は待ち人の思いがけずの訪問を期待させるものであるが、同時にまたそれは、しばしばその期待を裏切って、待ち人の不在と欠落とを深く思いしらしめるものでもあった。

と結論づける。「あるべきものの［不在・欠落］を内在する［希望・契約］の花」である。

一方「桜」については、『枕草子』「清涼殿の丑寅の隅の」の

高欄のもとに青きかめの大きなるをすゑて、桜の、いみじうおもしろき枝の五尺ばかりなるを、いとおほくさしたれば、高欄の外まで咲きこぼれたる昼方…

の例をあげ、青い大きな花瓶に挿された豪荘華麗な満開の桜の光景を中関白家の往時の栄耀栄華を記念し賞讃する慶賀の構図とする。また、「花見んと植ゑけん人もなき宿の桜は去年の春ぞ咲かまし」（『新古今集』・巻第八哀傷７６３・大江嘉言）の例などを引き、

自然の悠久と人事のはかなさの対比という、より大きな抒情様式のなかでは桜と梅とは共通する一面があるわけだが、［欠落・不在］を喚起する梅に対し、それがただちに人の［死］と密着したものとして措定されるところに、桜に賦与された独自の表象性がある。

とする。維盛は、まさに平家一門の嫡流として、それを代

表し形づくる栄華の代弁者として絵物語のような「花の姿」が配され、光源氏のような「花のにほひもげにけおされぬべく」と描き出される。それは「死」と密着しものであった。大原に建礼門院徳子を訪ねた折にも「花のにほひ、月の光にたとへても、一方には飽かざりし御面影」（242）と描いて、その栄華は回顧される。維盛はまさに平家一門を象徴する存在として配置されているのである。かたや資盛も、もちろんその弟ではあるのだが、作者自身にとっては恋人の死であり、「梅の花」に執着した資盛は「あるべきものの欠落・不在」としての意味が大きく内在しているといえる。

以上見てきたように、『源氏物語』引用から二人の貴公子が「桜」と「梅」とに対比されていく様相は、二人の貴公子の人物像、右京大夫との関わりを際やかに示している。右京大夫は父から『源氏物語』をはじめとする王朝的教養を伝授され、まさにそれを血肉化していた。その自在な表現化の跡をここにも確かめることができる。

七

さらに表現の基底にあるものを考えたい。『右京大夫集』には資盛の手紙を漉き返した料紙に消息経を書き、裏打ちして地蔵菩薩六体を書き供養したことが記されている。これは資盛の没後五七日忌（三十五日）の追善供養であったからだろう。[32] さらに、尊勝陀羅尼などを多く書いた（書いてもらった）と記す。尊勝陀羅尼は、尊勝仏頂の功徳を説く陀羅尼で、これを読誦、書写、供養することにより罪障消滅・延命などの功徳があるとされ、亡者廻向に読誦することもある（『望月仏教大辞典（増訂版）』・『日本国語大辞典』など）。その霊験譚は、『宇津保物語』・『続本朝往生伝』・『大鏡』・『今昔物語集』などに多く伝えられている。

『平家物語』（覚一本・巻六「飛脚到来」）には、

同〈治承五年二月〉七日、大臣以下家々にて、尊勝陀羅尼、不動明王、書供養ぜらる。〈稿者注〉[33]

とあり、このことは『一代要記』「安徳天皇」の条にも

二月七日大臣以下於里第可書写供尊勝多羅尼不動明王之由被宣下依天下兵乱也

と記されている。閏二月四日、平清盛が没する直前の風雲急を告げる事態の中での供養であったことが理解される。この時のことを見知っていたと思われる右京大夫は、資盛への相応しい供養の方法として意図的に尊勝陀羅尼供養を選び行ったと考えられるのではないか。尊勝陀羅尼は平家の人を追悼するに相応しい経典であり、平家一門の一員として資盛を顕彰する意味も担っていたと見なすべきであろ

う。

そして、そこに先に確認したような「幻巻」の源氏引用が加わり、さらにこの哀傷場面は重層的な意味を持つだろう。「幻巻」で、光源氏が紫上の文を焼くに至る場での背景は、主不在でも変わらず巡り来た春であり、紅梅やとりどりの桜に彩られる世界であった。「幻巻」を想起させることで、『右京大夫集』は自身が奉仕した後宮世界を讃美し、維盛・資盛を中心とした平家公達の面影を記し留めようとしたのである。

またさらに『源氏釈』についても補足的に述べておきたい。「桜人巻」を含まぬ『源氏釈』、「桜人巻」を含んでも前田家本のような注が施されていない冷泉家本のような『源氏釈』などの存在から、様々な異本を想定できる状態であり、右京大夫が披見した本を断定することは難しい。

しかし、平家一門の栄華の時代を語る右京大夫は、その方法として『源氏物語』を中心とした作品世界を重ね合わせた。それはおそらく、世尊寺家、父・伊行の身近にあった作品群の数々が、右京大夫に取り込まれ縦横無尽に内在しそのフィルターを通して生み出されたのである。

そのように考えると例えば、

……都は遥かに隔たりぬる心地して、「何の思ひ出でにか」と心細し。夜更くるほどに、雁の一列、このゐたる上を過ぐる音のするも、まづあはれとのみ聞きて、すずろにしほしほとぞ泣かるる

憂きことは所がらかとのがるれどいづくもかりの宿と聞こゆる　（２４６）

の歌は、「明石巻」で光源氏がついに明石上と結ばれた後、都の紫上への手紙に書いた

しほしほとまづぞ泣かるるかりそめのみるめは海人のすさびなれども

を背景としていると考えられるだろう。

資盛以外との恋はかりそめであったと回想し、『右京大夫集』はさらにこの歌のあとには追憶の歌が続けられる。『源氏釈』諸本（抄・冷・吉・都）は、紫上に明石君のことをほのめかす部分を要約し、「忘れじと誓ひし事を過たば三笠の山の神もことわれ」（冷泉家本所引、出典未詳）の歌を引く。ここにも『源氏釈』享受の痕跡を辿ることが出来るかもしれない。

以上、右京大夫の『源氏物語』および『源氏釈』享受がいかにその作品『右京大夫集』に影響を与えているかについて考察した。その過程でこの源氏引用が単なる表現をなぞったというにとどまらず極めて本質的な引用となってい

ることを確認できたように思われる。

ただ『源氏釈』と『右京大夫集』の比較など端緒についたばかりでいまだ不十分なところが多い。今後さらに考察を進め、より多角的に『右京大夫集』の引用の問題やその言説の持つ意義につき考究していく所存である。

※『建礼門院右京大夫集』の引用は、『新編国歌大観』（角川書店）に拠った。適宜、久保田淳氏「建礼門院右京大夫集」（新編日本古典全集47『建礼門院右京大夫集・とはずがたり』小学館、平成11）、谷知子氏「建礼門院右京大夫集」（和歌文学大系23『式子内親王集・建礼門院右京大夫集・俊成卿女集・艶詞』明治書院、平成13）を参照し、一部私に改めた。『伊勢物語』・『源氏物語』・『枕草子』・『更級日記』・『平家物語』・『古今和歌集』・『新古今和歌集』の引用は、それぞれ『新編日本古典全集』（小学館）に拠った。

注

（1）仁木夏実氏「高倉院詩壇とその意義」（「中世文学」50、平成17・6）など。

（2）藤平春男氏「建礼門院右京大夫集」（鑑賞日本の古典12『建礼門院右京大夫集・とはずがたり』尚学図書、昭和56）、久保田淳氏『藤原定家とその時代』岩波書店、平成6）など。

（3）『源氏物語大成　巻七』「研究資料篇」（中央公論社、昭和31）

（4）本位田重美氏『評註　建礼門院右京大夫集全釈』（武蔵野書院、昭和49）、糸賀きみ江氏「平家文化」（『講座日本文学・平家物語下』至文堂、昭和53）、遠田晤良氏「建礼門院右京大夫の源氏物語受容」（「比較文化論叢1」、平成10・3）、谷知子氏『中世和歌とその時代』（笠間書院、平成16）など。

（5）谷氏、注（4）に同じ。

（6）谷知子氏「建礼門院右京大夫集」（和歌文学大系23『式子内親王集・建礼門院右京大夫集・俊成卿女集・艶詞』明治書院、平成13）。

（7）久保田淳氏「建礼門院右京大夫集」（新編日本古典全集47『建礼門院右京大夫集・とはずがたり』小学館、平成11）。

（8）注（7）に同じ。

（9）「源氏釈の形態と性質」（『源氏物語大成　巻七「研究篇」』中央公論社、昭和31）

（10）「源氏釈から紫明抄へ」（『源氏物語の研究―成立と伝流―』笠間書院、昭和42）

（11）「源氏物語注釈の発生―『源氏釈』の形態―」（『源氏物語注釈史の研究　室町前期』桜楓社、昭和55）

（12）「北野克氏蔵「末摘花・紅葉賀断簡」について―『源氏

釈』原型本の推定―」（『源氏物語享受史論考』風間書房、平成21）

（13）「『源氏物語』注釈書における文献摂取の一位相―『異本紫明抄』所引「勘文」・「勘物」をめぐって―」（『源氏物語注釈史の基礎的研究』おうふう、平成6）

（14）『源氏物語古注集成第16巻　源氏釈』（おうふう、平成12）

（15）「注釈の始まり」（『講座　源氏物語研究第三巻　源氏物語の注釈史』おうふう、平成19）、栗山元子氏「解題」（中野幸一氏・栗山氏『源氏物語古註釈叢刊第一巻　源氏釈・奥入・光源氏物語抄』武蔵野書院、平成21）

（16）注（14）に同じ。

（17）笠間書院、昭和44。

（18）久曽神昇氏『昭和美術館蔵伝津守国夏筆　建礼門院右京大夫集と研究』（ひたく書房、昭和57）、なお、久曽神氏は伝本を四類に大別する。

（19）注（13）に同じ。

（20）加藤昌嘉氏「『源氏物語』桜人巻の散佚をめぐって」（国文学研究資料館　平成17年度研究成果報告「物語の生成と受容」平成18・3）

（21）『冷泉家時雨亭叢書42　源氏釈・源氏狭衣百番歌合』（朝日新聞社、平成11）

（22）注（20）に同じ。

（23）主なもののみをあげる。「一括成立説」―富倉徳次郎氏『王朝の悲歌―建礼門院右京大夫集―』弘文堂、昭和45）、後藤重郎氏「建礼門院右京大夫集七夕歌に関する一考察」（「名古屋大学文学部研究論集」52、昭和46・3）など。「二期成立説」―本位田重美氏「注（4）に同じ」、伊狩正司氏「建礼門院右京大夫集構想論のための覚書（一）―第一四番以下40首の題詠歌の配置の意図をめぐって―」（日本大学「語文」15、昭和38・6）・同「建礼門院右京大夫集構想論のための覚書（二）―九州大学本と吉水神社本との成立の先後をめぐる一試論―」（日本大学「語文」17、昭和39・6）、玉井幸助氏『日記文学の研究』（塙書房、昭和40）、萩原真佐子氏「建礼門院右京大夫集試論―家集編纂時期と編纂意図をめぐって―」（「国文目白」23、昭和59・2）、谷知子氏『注（6）に同じ』など。「複数段階成立説」―樋口芳麻呂氏「建礼門院右京大夫集の発端」（『日本文学の伝統と歴史』桜楓社、昭和50）、佐藤恒雄氏「建礼門院右京大夫集の成立―新古今からの影響歌を起点として―」（「言語と文芸」87、昭和54・3）など。

（24）注（5）に同じ。

（25）注（4）に同じ。

(26) 名著刊行会、昭和46。
(27) 『群書類従　第29輯』（続群書類従完成会、昭和57改正版）。
(28) 桑原博史氏（「隆房の作品」『中世物語の基礎的研究　資料と史的考察』風間書房、昭和44）、中野幸一氏「平家公達草紙」をめぐって」（『物語文学論攷』教育出版センター、昭和46）、久松潜一氏・久保田淳氏『建礼門院右京大夫集　付平家公達草紙』（岩波文庫、昭和53）、伊井春樹氏「『安元御賀記』の成立―定家本から類従本・『平家公達草紙』へ」（「国語国文」61・1、平成4・1）、春日井京子氏「『安元御賀記』と『平家公達草紙』―記録から〈平家の物語〉へ」（「伝承文学研究」45、平成8・5）
(29) 本稿「一」前掲の拙稿。なお『玉葉』との関係については、堀淳一氏「後白河院五十賀における舞楽青海波」（『古代中世文学論考　3』新典社、平成11）が、『平家物語』との関係については、櫻井陽子氏「『建礼門院右京大夫集』から『平家物語』へ」（「中世文学」55、平成22）が論じている。
(30) 横井孝氏は、『貫之集』（第九・878）の「かのうたに返しよみておたぎにてず経して、かはらにてなんやかせける。」の用例から、このような慣習が生まれつつあったと指摘し、「仏教思想と容易に結びついて、死者への供養へと転位してゆくのが『源氏物語』の時代の趨勢であろう。」と述べられる。（「円環としての主題生成」『源氏物語研究叢書1　円環としての源氏物語』新典社、平成11）
(31) 『詩歌の森―日本語のイメージ』（大修館書店、平成7）
(32) 松本寧至氏『日本の作家18　追憶に生きる　建礼門院右京大夫集』（新典社、昭和63）。なお、後年の阿仏尼は為家五七日忌の追善供養に『阿仏仮名諷誦』を遺している（拙稿「『阿仏仮名諷誦』試論」「實踐國文學」46、平成6・11）
(33) 京都大学附属図書館所蔵・平松文庫『一代要記』（流布本、web版）

（くぼ　たかこ・平成四年度実践女子大学大学院博士課程単位取得満期退学）

	D．Bの施注所在（＊２）
五・3397、和漢朗詠集下・469、斎宮女御集、57	明石（都）、橋姫（冷・前・都）、手習（都）
歌六帖四・2025、万葉集十一・2808	帚木（冷・前・吉）
4374、伊勢・和漢朗詠集上326、伊勢・伊勢集、303	早蕨（抄・冷・前・吉・都）
	手習（冷・前・吉・都）
	紅葉賀（冷・前・吉）、東屋（都）
	宿木（冷・前・吉・都）
下、733	葵（抄・冷・前・吉・都）
六帖三、1850	宿木（都）
六十五、119	東屋（吉・都）、浮舟（冷・前・吉・都）
今和歌六帖六、3548、業平・伊勢物語四十九、90	総角（冷・前・吉・都）
308	常夏（抄・冷・前・吉・都）、東屋（吉・都）
	賢木（冷・前・吉・都）
六帖四、2034	桐壺（冷・前・吉・都）
六帖五、3500	若紫（都）、胡蝶（都）、椎本（前・吉）、東屋（都）
物語二十一、41	若菜上（都）
2907・貫之集591	桜人（前）
	幻（都）
帖六、3704	藤裏葉（都）、柏木（都）、横笛（冷・前・吉・都）
帖一、715・業平集、60、伊勢物語八十三、152	末摘花（抄・北・都）
帖六、4255、伊勢業平とぞ・和漢朗詠集上173・伊勢物	早蕨（都）
1972・和漢朗詠集下787、躬恒・躬恒集324	桜人（前）
七、８	須磨（冷・前・吉・都）、玉鬘（冷・前・都）
	蜻蛉（都）
六帖五、3276	明石（都）
1270、伊勢・古今和歌六帖一、330、伊勢・伊勢集、208	須磨（抄・冷・前・吉・都）
六帖四、1973	東屋（冷・前・吉）、浮舟（前・吉・顕）
	賢木（冷・前・吉）
帖四、2139	桜人（前）
物語二十一、41	若菜上（都）
集上、233、上陽人	幻（冷・前・吉・都）
1314、読人知らず	竹河（都）

釈」（おうふう）に拠る。

吉川氏蔵「源氏物語」、（都）都立中央図書館蔵「伊行源氏釈」、

組合総合目録』12、平成11・11）。

【別表】

A.『右京大夫集』歌番号・初句など	B.『源氏釈』施注引用和歌・初句など	C. Bの所収和歌集など出典所在（＊1）
4　松風の	琴の音に	拾遺集八、451、斎宮女御・古今和歌六帖
20　おきつなみ	伊勢の海人の	新勅撰集十四、872、読人知らず・古今和
35　はなをこそ	春霞	古今集一、31、伊勢・古今和歌六帖六、
47　つくもがみ	百年に	伊勢物語六十三、114
52　みし人は	東屋の	（催馬楽）東屋　6
56　うつしううる	不是花中偏愛菊	元稹詩集・和漢朗詠集上、267、元
104 とまるらむ	鴛鴦瓦冷霜華重	白氏文集十二、596、長恨歌・新撰朗詠集
135 いくよしも	いく世しも	古今集十八、934、読人知らず・古今和歌
145 もろかづら	恋せじと	古今集十一、501、読人知らず・伊勢物語
156 みな月を	うら若み	新千載集十一、1016、在原業平朝臣・古
157 おもひかへす	筑波山	新古今集十一、1013、源重之・重之集、
189 おきてゆく	天の戸を	新古今集十四、1260、読人知らず
193 おもふどち	むばたまの	古今集十三、647、読人知らず・古今和歌
197 ぬれそめし（草のゆかり＊3）	紫の	古今集十七、867、読人知らず・古今和歌
205 またためし（ありしよりけに＊4）	忘るらむと	新古今集十五、1362、読人知らず・伊勢
226 いかで今は	いにしへに	古今集十四、734、貫之・古今和歌六帖五、
229 かなしさの	かひなしと	古今和歌六帖五、3379
234 露きえし（ひと村すすき＊5）	君が植ゑし	古今集十六、853、御春有輔・古今和歌六
240 今や夢	忘れては	古今集十八、970、在原業平・古今和歌六
249 こととはむ	五月待つ	古今集三、139、読人知らず・古今和歌六語六十、109
251 我が心	我が恋は	古今集十二、611、躬恒・古今和歌六帖四、
258 うらやまし	いとどしく	後撰集十九、1352、在原業平・伊勢物語
266 あけがたに	しでの山	拾遺集二十、1307、伊勢・伊勢集、27
272 たなばたの	嬉しきを	古今集十七、865、読人知らず・古今和歌
299 あひにあひて	あひにあひて	古今集十五、756、伊勢・後撰集十八、
304 ながむれば	我が恋は	古今集十一、488、読人しらず・古今和歌
310 世中は	世の中の	千載集十六、1027、源俊頼
316 えぞしらぬ	えぞ知らぬ	古今集八、377、読人知らず・古今和歌六
323 今はただ（ありしよりもけに＊6）	忘るらむと	新古今集十五、1362、読人知らず・伊勢
335 くらきあめの	秋夜長　夜長無寐天不明	白氏文集三、131、上陽白髪人・和漢朗詠
339 君がこと	世の中を	拾遺集八、507、読人知らず・同二十、

A.『建礼門院右京大夫集』は『新編国歌大観』（角川書店）に、B.『源氏釈』は「源氏物語古注集成16・源氏
D.「施注所在」の（）略号は、上記『源氏釈』に記載の以下の諸本を示す。
＜完本＞（冷）冷泉家時雨亭文庫蔵「源氏物語釈」、（前）前田育徳会尊経閣文庫蔵「源氏物語釈」、（吉）岩国
＜抄出本＞（抄）宮内庁書陵部蔵「源氏物語注釈」所収「源氏或抄物云」、
＜断簡＞（北）北野克氏蔵「『末摘花・紅葉賀』断簡」、＜古筆切＞（顕）「伝顕昭筆『浮舟』」断簡（『京都古書
（＊1）部立などは省略した。（＊2）項目の通し番号などは省略した。
（＊3～6）詞書の該当箇所を示す。